

平成 29 年度 第 5 回名取市総合教育会議 議事録

1 会議の年月日

平成 29 年 5 月 30 日（火）

2 会議の場所

名取市役所 5 階第 1 会議室

3 出席者

山田市長、瀧澤教育長、武田教育長職務代行委員、相原教育委員、佐々木教育委員
浅野教育委員

4 欠席者

なし

5 傍聴者

1 名

6 説明のために出席した者

保科教育部長、及川理事兼学校教育課長事務取扱、相澤教育部次長兼庶務課長、
五十嵐生涯学習課長、大友文化・スポーツ課長、佐藤教育部企画員兼庶務課長補佐、高
橋主幹兼庶務係長

7 議題

- (1) 生きた英語学習について
- (2) 家庭教育について

8 開会時間

午後 1 時 30 分

9 会議の概要

相澤教育部次長兼庶務課長

それでは定刻となりましたので始めさせていただきます。

教育委員の皆様におかれましてはお忙しいところ、「第 5 回名取市総合教育会議」にご出席をいただきまして大変ありがとうございます。

会議に入ります前に、お手元にご用意をいたしました資料の確認をさせていただきます

す。1枚ものの「第5回名取市総合教育会議次第」と、あとホチキス留めをしております「第5回名取市総合教育会議資料」の2つをご用意しております。よろしいでしょうか。

また本日の会議は事前にご案内のとおり、公開となっておりますのでご了承お願いいたします。

なお、本日の会議の内容につきまして、録音をしたいという旨、申し出がございます。本日、この申し出に対して、許可をしてよろしいでしょうか。

全委員

はい。

相澤教育部次長兼庶務課長

では、申し出につきましては、許可するという事でお願いたします。

開催にあたりまして、山田市長よりご挨拶をお願いしたいと思います。

山田市長

皆さんこんにちは。教育委員の皆さまには、大変お忙しいところご参集いただきましてありがとうございます。

さて、震災から6年2ヶ月経っておりますが、今ようやく閑上の復興のほうも目に見えるかたちで進んできているような状況でございます。

閑上小中一貫校についても、校舎が今、4階部分で一番上のところを工事しており、体育館については、屋根がもう架かったような状態になっております。私も機会があれば是非拝見したいと思っておりますが、来年の4月の開校に向けて、準備が進められています。

市としましてもしっかりとPRも含めて、新しい学校の魅力というものを、周知を図っていきたく思っているところであります。

先日、指導主事の鈴木さんと、東京の方に出張に行きまして、ICT関係を使った教育のあり方について、お話しを伺う機会がありました。

やはり世の中、進んでいるなあということと、これらをいかに使って教育を実のあるものに代えていくかということに、これからどう進めていったらいいのかなということ課題をいただいた気もいたしております。

いずれにしても、名取の子ども達がのびのびとした環境の中で、そしてまた、充実した教育環境の中で、このふるさと名取で過ごしていけるように、今後とも皆さまといろいろ協議をしながら、教育環境づくりに努めて参りたいと思っております。

本日の課題は、2つということで、生きた英語教育についてと、もう1つは家庭教育についてということでございます。是非、短時間にはなりますが、ご忌憚のないご意見等いただいでですね、充実した会議にしたいと思っております。今日はどうぞよろしくお願いたします。

相澤教育部次長兼庶務課長

ありがとうございました。それでは、さっそく(3)の議題に入ります。ここからにつきましては、名取市総合教育会議設置要領第4条第3項によりまして、市長が議長といたしまして議事をさせていただきます。

市長よろしく願いいたします。

山田市長

はい。それでは議題に添って進めてまいります。よろしく願いいたします。

まず始めに議題(1)「生きた英語教育について」であります。

宮城県でも、今年度から、生徒の英語力向上事業に着手し、小学校から高校まで、一貫した英語教育充実のための計画づくりに取り組むと聞いているところであります。コミュニケーションの道具としての英語力の向上が求められているところであります。

先日、東京の方に出張したら、あるホテルで宿泊している方の約8割が外国人ということで、必ずしも英語ということではなくて、ほんとにインバウンドというものを実感してまいりました。

仙台空港の所在都市として、やはり名取市としてもそういう国際感覚を身に付けた子ども達を教育していかななくてはいけないなと感じたところでもあります。

そういう意味で、コミュニケーション能力を身に付けるために、どのような教育をしていったら良いのか、というあたりにつきましても、委員の皆さまのご意見を伺えればというふうに考えております。

まずは事務局の方から、英語学習について、現状と課題、今後の取り組み等について説明をお願いいたします。

及川理事兼学校教育課長事務取扱

それでは、私のほうから、資料に添って説明させていただきたいと思います。

今、お話しありましたとおり、現在の英語学習、そして今後の英語学習に向けて、大きく2点お話しさせていただきます。

まず、現在小学校で行っております、外国語活動導入の経緯について、若干触れておきたいと思います。

この外国語活動が、導入された背景としては、異なる文化文明との共存、国際教育の必要性ということがまずあったのではないかと思います。

そして外国語活動、あと教科の英語ですね。外国語のそれぞれの目標についてですけれども、共通項の部分がございまして、共通項としましては、外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションをはかる態度の育成をはかるという部分が共通項でございます。

それで、外国語活動の方につきましては、その後ろについています目標として、音声や表現に慣れさせコミュニケーション能力の素地を養うという部分が目標になります。

また、教科としての外国語、英語ですね、この目標としてはコミュニケーション能力の基礎を養う。

「コミュニケーション能力の素地を養う」と「基礎を養う」という部分でちょっと違いがあるということです。

では、「コミュニケーション能力の基礎」というのは何かといいますと、よく英語のほうでは4技能、聞く、話す、読む、書く、この4つの技能を基礎としているところがございます。

現在は、小学校5、6年生で週1時間、外国語活動という授業を展開しております。

中学校では、これまでどおり1、2、3年とも週4時間、英語を学習しているところがございます。

今後、平成32年に学習指導要領が改定されまして、大きく変わる部分としては、小学校で今行っている外国語活動、これが、5、6年生から小学校3、4年生の方に移行してくる。そして、小学校5年生6年生の部分では、外国語活動ではなくて教科英語が入ってくるということになります。

まだ、はっきりとした改定された学習指導要領が示されておりませんが、先程お話ししましたように、外国語活動と教科英語の違いという部分で、素地を養うのか、基礎を養うのかという部分が違ってくるところですので、小学校5、6年生でその4技能というところが入ってくることになろうかと思えます。

また、中学校では、平成33年から学習指導要領改定実施ということになるわけですが、そこでは基本的にALL ENGLISH 英語で授業をして、子ども達が英語で答える。そういう内容に変わっていくということになります。

今現在、名取市での外国語活動や取り組みということ、ALTの活動を中心にお話しさせていただきたいと思えます。

市内では、ALTを中学校に5名配置しておりまして、その5名が小学校に行って授業をする、そういったかたちで授業を進めているところです。

このALTの活用によって、子ども達のコミュニケーションに対する積極性の高まりであるとか、聞く力の向上など、一定の成果がみられます。その小学校の状況に応じた活用がされているわけですが、例えばクラス数が多い小学校においては、ALTが来た時に、週1時間で来た時に、他の学年の授業へも展開できる。そういう余裕があります。

逆に学級数が多い小学校の場合には、5年生6年生の授業で手一杯というところがありますが、その学校によって授業以外での外国語の活動以外での活用、そういう場面も設定してそして英語に親しむ、外国語に親しむ、そういう機会をつくっていくということでございます。

また、小学校の先生方は、平成32年の学習指導要領の改定ということでALTも一緒に授業するというところもあるわけですが、あくまでもALTは補助ですので、学級担任が中心となって授業を進めるということになります。

そこで、今までやってなかったことということになりますので、危機感を持っているところでもあります。それに向けて、消極的な部分だけではなくて、研修をして、そしてそれに備えていきたいという意気込みを持っているということでございます。

この生きた英語学習をということでお話しをさせていただきますと、まず、ALTでの活用ということもそうですけれども、生の英語に接するということが非常に大切になってくるんだと考えております。

その場面設定とか目的のあるところで、子ども達が自分の思いを英語で話したり、やり取りができる。それを音声を通してやっていけるというところが重要になってくるんだろうと思います。

そのためには、教材開発であったり、授業の準備であったり、あとALTとの打合せ等々、今後、先生方の英語力の向上ということが、課題になってくるのかなと思います。

そして、小学校で教科英語がスタートするということが、教科英語の学習が入ってくることになります。そして中学校へ繋げていく。

小中の滑らかな接続というところが大切になってくるのではないかなと思います。

そのためには、小学校中学校教員の教育内容にあった実践の相互理解ということがカギになってくるのではないかなと思います。

ちょっと話題からはずれるかもしれませんが、来年度開校予定の閑上義務教育学校では、同じ校舎の中で、小学校中学校の先生が教育実践を展開するわけですから、自然とそういう環境が整備されていくと思いますし、また、閑上義務教育学校以外の中学校区においても、小中連携を推し進めていこうと考えております。

その中で、お互いの授業を、小中学校それぞれがお互いの授業を参観したり、また、中学校の先生が小学校に出向いて授業を行ったり、中学校区単位で研修を行ったりして小中の連携の中でも外国語活動、英語教育という部分で連携を図っていければいいなと考えています。

そして、それが子ども達の方に力として備わっていったら、コミュニケーション能力というものが向上できればいいなと考えているところです。

この外国語活動、英語教育の目指すところというのは、外国の人とコミュニケーションをとることができるようになる、そして相互に文化を理解し合う、そういうふうな態度が養われれば、というふうに期待しているところでもあります。

またちょっと話がずれるかもしれませんが、このコミュニケーションをとるという部分で、今、言語活動の充実ということも各教科の中で実践していているところです。

このコミュニケーションの素地を養う部分でコミュニケーションを取ろうとする態度を養うかという部分では、他の教科にも良い影響が出て来るのではないかと期待しているところです。

資料に添って説明させていただきました。以上でございます。

山田市長

はい、ありがとうございました。

只今、事務局から説明がありましたとおり、平成 32 年度から学習指導要領の改定のもと、英語学習が大きく変わるようであります。小学校の先生の負担もだいぶ大きくなるだろうと想定できるわけですが、今、ご説明があったとおり、ALT の活用なんかも含めて、委員の皆さまから、只今のお話しも含めてご意見等いただければと思いますがいかがでしょうか。

生きた英語の活用についてということで、認識としてまず外国語活動その素地を養うと、教科英語として基礎を養うとその 4 機能ですか養うという部分まず違うんだということがあると思うんですが、目標としてはコミュニケーションが取れるというようなことと、相互の文化を理解するというようなところまでもっていきたいということなんでしょうか。

武田先生いかがですか。

武田教育長職務代行委員

はい。今日はよろしく願いいたします。

何点かお話ししたいところがあるんですけども、まず、こちらの方から口火を切りたいと思うんですが。

今日は課長さんから、生きた英語学習について基本的な教育委員会としてのこれからの取り組みについてお話しをいただきました。充分理解をすることができました。

それで、先日いただいた広報なとりの 1 ページのところ、市長さんの「縦走」のところに、国際交流都市名取というお話しが載っていました。3 ページには、カナダに行った子ども達の交流の状況が載っていたわけです。直接生きた英語学習についてということではないのですが、関連があるということと、それから、今日の会議の議題として英語学習について、生きた英語学習についてということなので、名取の教育の目玉として、市長さんがこういうふうなことがあったらいいよねという考えとか、そのへんのところをまずお聞きして、論を進めて、あるいは私、お聞きしたいなと思いますので、そのへん市長さんの気持ちをお聞かせいただければうれしいなと、よろしく願いをしたいと思えます。

山田市長

あまりこう、私の方で具体的な個別な話をして、議論を固めてしまうのもどうかと思いますので、バクツとしたところで話ささせていただければと思います。

ALT が全ての学校におられるということもあるので、やはり、まずひとつは、英語の文法なり単語なり、基礎をやるというこれまでの教育はもちろんベースとして必要だと思うんですけども、先ほど積極性が養われる高まりがあったのじゃないか、ALT との会話の中で、コミュニケーションの中で、積極性が養われる高まりがあった、聞く力の向上

がみられたんじゃないかということがありましたが、まさにそういうふう、やはり本当にここに議題であるとおりに、生きた英語ということでコミュニケーションをとる、当初はまだ英語しゃべれないんだけど、まず外国の方、違う言葉をしゃべる方々が隣りにいてその方とコミュニケーション、触れあう機会が今より格段に多いというような何かそんなふう英語に接するオポチュニティというんですかね、そういうことを増やせないかなと思っております。

ですから、小学校の先生の英語力を上げていかなきゃいけないということももちろんベースとしてはあるんですけど、できればそれもそうなんですけど、やっぱり、ネイティブの人とコミュニケーションをとる機会をなるべく増やすということが一番なのかな。これは、学校の現場においてもそうですし、前回、何かの機会でご提言申し上げたかと思うんですけど、ALTは地域に住んでおりますので、その地域の行事の中にも入っていただいたりとか、学校という箱の中だけじゃなく、今日の日程とちょっと違うかもしれないのですが、いろんな地域の中でもそういう触れる機会があったりとかというような、そういう意味でもっともっとALTの方といっぱいコミュニケーションをとれるような、そんな教育があればいいなというふうに思います。

武田教育長職務代行委員

はい、ありがとうございます。

山田市長

そのようなことなんですけど、どうでしょう。

武田教育長職務代行委員

続けて私が話すのですが、2020年度から、全国で小学3年生以上の英語活動と、5、6年生の英語、教科英語が始まるわけですので、新しい教育活動が全国どこでも行なわれる。名取でなぜ英語活動なのかということ。やはり、今、市長さんがお話しになったように、空港がある、国際空港があると、それから、永年に渡って、中学生の子ども達が外国との交流を推し進めてきているということは、あとはALTの方々が各中学校に1人ずつ配置されている。

名取のこれからの将来を考えていくうえで、空港も含めて国際交流都市っていうのは、大きな教育の指針っていうか、ひとつの方向性があるんだろうと。

これから全国で行われている英語と同じような色合いではなくて、その教育に名取らしさというのを付加していくというんですかね、なんでしょう、コショウみたいな、スパイスみたいな、であるならば、名取らしさがそこに出て来るのではないかなってことで、生きた英語学習についてはより名取らしく進めていくというのはいいなあと思っております。

あとは、委員さん方、同じようにいろいろお考えでしょうから、各委員さんからお話し

をお伺いしたらよろしいかなと思うんですけど。よろしくお願いします。

山田市長

全国共通、学習指導要領改定の中で、英語教育を変えるという全国的な流れがあるなかで、名取らしさというスパイスのようなものを加えていってはどうかということでした。そのことでも結構ですし、何かこれまでのお話しの中なかで。

相原委員

私も、その生きた英語ということで、私なんか昔、英語だと、外人としゃべったこともないのに、英語のいろいろ、辞書を見ながらやるような話ではなくて、生きた英語というのは、要は外国の方ときちっとコミュニケーションがとれて意思疎通ができるというのがうんと大事なことで、そのためには、日本人が英語を使って子ども達に指導すること以上に、やっぱりALTとかなんかの人たちをどうやって活用するか、どれだけALTの人たちが、その子ども達の前に出られる機会を増やしていくかということが非常に大事で、その先ほどの説明の中で、もちろん小学校の先生が主体的にそこでALTを使う今の状況はそうなんですけど、その小学校の先生の負担って相当大きいと思う。今の時点では。

そのALTと小学校教諭の交流とか研修とかそういうのも、事前に十分行って、そのカリキュラムの中でALTをどう生かすかということに、私も偶然かもしれないけど、名取の今いるALTのある人が、榴ヶ岡の桜の花見にも来てたり、お盆祭りにも来てたり、いろんなことで、あっち行ったりこっち行ったりしながら、いろいろ学んでいたんだと思うんですよね。だから、名取の中の様々な行事なんかの時にもそういうALTの人たちの出番とかなんかをつくりながら、子ども達があんまり緊張しないで気軽にALTと交流できるような機会ってうんと大事になってくるので、そういうのも含めて、生きた英語力の向上に向かっていければなあ。

それともう一つは、ちょっと小学校の先生の負担が大きいので、さっきもちょっと言いましたけど、小学校教諭に対する何らかの英語の、ALTだけでなくね、なんかその指導のあり方みたいなことの研修会は充分行っていただければなあと思います。

山田市長

はい。ありがとうございます。

小学校の先生方とALTの交流の機会というご提案もありましたし、あと、先生に対する研修というんですかね、これは事務局というか、市としては何か今具体的なことはあるんですか、どうなんでしょう。

及川理事兼学校教育課長事務取扱

はい。直接、小学校の先生方を対象とした市教育委員会としての研修会ということは今

のところ計画はしておりません。

以前、外国語活動が導入された際、その際には県教委の研修の中では数多くそういう研修会は開かれておりましたし、今後、研修センター中心にしてもらってそういう研修は多く開かれていると聞いているところです。以上です。

山田市長

県教委主体で進めていくっていうようなことだろうと思うんですが。

武田教育長職務代行委員

はい。ひとつそこで今、相原委員さんとそれから課長さんからおっしゃったことなんですが、ひとつ市長さんに特にお願いがあるんですが。

山田市長

はい。

武田教育長職務代行委員

説明の中にも市長さんのお話しの中にも小学校の先生方がこの生きた英語学習を、自分が担任と進めていくためにも非常に負担が多いというふうな話し、これ現実問題としてあると思うんです。特にあの年配の先生方や「えー、今から英語すかや」ってこう構える方も結構いらっしゃるじゃないか。それも含めてなんですけど、いまALTの方々が、各中学校区にいらっしゃって、小学校にも行っている、指導されているわけなんですけど、これからひとつはですね、小学校の中の先生方の英語指導力というのを、いかに高めていくか、それからALTの交流の方も含めて、全名取市の中でどういうふうにこの英語学習を進めていくかというのは、大きな課題になってくるだろうと思います。

そのところがうまくできると、名取でも特色のある、それこそあの最初の議題にありました、生きた英語学習が出来てくる。それで、お願いなんですけど、どこがどうやって指導したり、支援したりしていったりしていかってなるんですけども、やはり教育委員会の中に英語の力を持った指導主事さんを雇って、入れていただいて、名取市全体としてどういうふうに進めていくか、ひとつは先生方の指導をどうするか、ALTの取りまとめや、コーディネイトをどうしていくか、あるいは、授業を観ていただいて、その名取としての英語学習がどういうふうを高まっていくかっていうのには、人が必要だと思う。人を活かすには、やはりお金も必要なわけですので、そこらへんのところは財政的なことも含めると、市長さんのお力をいただいて、教育委員会に指導主事さんを入れていただいて層を厚くし、その中にさっき言ったスパイスといって、じゃ、名取の英語学習ってどういうふうにするの、小中連携どうするの、というのを、付加価値を加えて進めていただけたかなと、是非、そうすると、今ここで、議論している事は結構花が咲くんじゃないかという思いがあります。

もうひとつ提案させていただいてよろしいですか。

この資料をいただいてから「ああ、すごいことが始まるんだなあ」って思ってたんですが、指導力とか支援の事だけ考えていたんですが、環境をどうしていくかっていうひとつがあると思うんです。

それでひとつのアイデアですが、ご検討いただければありがたいなと思います。

名取市には国際交流協会っていうのがあります。それで中学校の子ども達は、オーストラリア、カナダ、アメリカあとどこだっけな、行ったんですよ。それで各国との交流なんかもありますのでできるならば各国、英語を使う国で使われている教科書でいらなくなったものがある、いっぱい。

それから、二つ目は、子供さん達が読んだなんというか絵本とか童話とかそういったものを、けっこう余ってきてたりするんじゃないかな、それを交流協会の方々をお願いしてこう集めてですね、それで、名取市には今度10月に学校図書館支援センターというのが実働しますので、その中に、例えばそういった絵本とかいろんな教科書とかを、本っていうのは学年別、まあコンテナにして、各学校まわして、英語を直接目で触れて、触れる機会を持つ。それから、英語で書かれていますので、訳が必要ですよね、これは、ALTの方々にはちょっとご協力をいただいて、ある程度の訳を付ければ、3年生以下の子ども、1年生2年生の子どもでも、教科書とか童話とかを、読み方と訳が書いてあれば、直接小さい子供が目に触れる、そうすると3年生になった時に英語が見たり、話したりするのがスムーズにこうできるんじゃないかなというふうに思います。

さっき、名取の特色は何かって言ったら、図書館にそういう支援センターもありますし、学校図書館に司書さん達がいっぱいいますので、そういったものを活用して、この英語学習の外堀っていいですか、環境を整えていくっていうのも、ひとつのアイデアかななんていうことを考えていました。

ご検討いただければうれしいなあと思います。

山田市長

はい。さっきは国際交流のほうの実行委員会ですかね、中学校の海外派遣事業「友達in名取」の方はちょっと団体、構成団体ではありますけども、たしかに毎年各年ですね、行き来しているので、その際に英語の教科書を持って来てもらって、訳を付けて学校図書館、支援センターに置くなんていうのもおもしろいアイデアではあると思いますが、その他どうですか。

佐々木委員

えっと実はインバウンドという言葉も実感としてはなかったのですが、今日、急にインドネシアの方がちょっといらして、それでやっぱり通訳の方がいらっしたんですけれども、皆さん、いろんな英語圏でなくても英語を話される、やっぱり英語が共通語なんだなというのがすごく実感したのと、やはり各世界中で東北、特に沿岸部の被災地

とかってというのが、今すごく興味を持たれているっていうふうな事を、そのインドネシアの方々から、やっぱり伺いまして、復興庁の方でも誘致しようというふうな動きがあるようです。

山田市長

何を誘致。

佐々木委員

観光の方々を、東南アジアとかというようなことがあるようで、やっぱり英語を実際自分もそんなに話せるわけではないので、なんか書いてもらおうと何か意味がわかるみたいな感じで、全然耳からはすごい自分ながらくやしいなっていう感じで、やっぱり、もう少し英語力があればいいなあっていうのをまあ痛感したような次第で、これからもやっぱり、仙台空港を通じてたくさんの方々が外国からいらっしゃるっていうのは本当に今までとはやっぱり違うなというのを今日まさに実感したところです。

それでちょっと、資料を頂戴しまして、ALTさんが、名取市ではキメ細かく配置されて、すごく子ども達も本当に幸せだなというふうに思っておるのですけれども、そんな中でもやっぱりこう、先ほど先生の方からご説明いただいたように、現在は、外国語活動のところで、各学校によってやっぱりちょっと差があるのかな。ALTさんと触れられる時間が多い少ないの差がどうしても、大きい学校と、小さい学校では出ているのかなっていうのがありますので、やはりあの、3年後を見据えて、低学年の方たちもできるだけ、そのALTさんと触れあえるといった機会っていうものも、まんべんなくどの学校でも、そういった低学年から触れ合えるようなそういった機会をできるだけ増やしていただければありがたいなっていうふうに思いました。

もうひとつは、先生方の負担がとても大きいということで、名取市では、小中のお互いの授業を観あったりとか、中学校の先生の出前授業をしてくださったりとかというのがやれるということですが、全部の授業がそうでなくても、ある少しの、ALTさんの授業中心になった授業もあるし、担任の先生の授業もあるし、またその中学校の先生の教科担任みたいな先生なんて言うんですか。

山田市長

英語教科の先生。

佐々木委員

英語の教科の先生が、中学校から来てくださって、そして授業を受け入れるみたいななんかそういったいろいろなパターンが、これから今までになかったことでもそういうのが名取市ではこういうことができます、やっていますよっていうふうなことをすることによって、進んでいくことも多いのではないかなって言うふうに感じました。

山田市長

ありがとうございました。

今、ALTは5人いて、各小学校にも行っているわけですけど、児童数が多い少ないによってやはりその触れる機会っていうのは、確かにバラつきがあるんじゃないかっていうような問題意識のことと、それから中学校の英語の先生が小学校の方に行って、そういう人的なっていうか、交流をするっていうようなことのご提言いただきましたが、その点、瀧澤教育長お願いします。

瀧澤教育長

はい。今も含めてなんですけれども、私が、初めて外国に行ったのは40過ぎてからなんです。機会があってヨーロッパの方にはいかせていただいたんですけども、英語でコミュニケーションをとる力は、その時はなかったんです。行って感じたのは、言葉も違う、文化も違う、食べ物も生活様式も違うけど、同じ人間なんだなっていうことです。

いろいろ親切にさせていただいたこともあるし、それから私はうまく話せなかったんですけども、なんとか伝えようとする結構伝わるもんだなっていうのを感じました。

それで、これから子ども達に、どんどん小学校の中学年から英語にふれる機会が出てくるっていうなかで、子ども達に、違う文化、違う言葉を使っている人達も、皆同じ感情があって、喜びも悲しみがあったり、楽しいことや辛いことがあって生活しているんだっていうふうなことを、やっぱりどこかで解らせておくっていうのが基本、ベースにないとダメじゃないかなっていう感じがします。

それから、どうしても外国語っていうとイコール英語っていうふうになっちゃうんですけども、英語圏の文化だけではなくて、世界にはもっといろんな言語とか文化があるので、なんか英語圏だけがこうすばらしいっていう印象を、子ども達に持たせないような配慮っていうのが必要なんじゃないかなっていうような気がします。

なんかそういうのがベースにあって、やっぱりコミュニケーション力っていうのもさっきから何回も出ていますけれども、進んで外国の人ともコミュニケーションをとろうとするような、まず、気持ちを持たせる。その上で、英語に慣れ親しむっていうようなことだと思えます。

私、子どもの頃は、外国人とかがって本当にいなかったの、見ると本当に、びっくりして、陰に隠れて、こわごわ遠目に見てたんですけど、今の子ども達っていうのはまあ、少なくとも中学校にはもうALTがほとんど入っていますので、そういう感覚っていうのはなくなってきているんじゃないかと思えます。

ALTの配置について、佐々木委員がお話したことなんですけども、今、5人のALTが中学校区に配置されてて、学校規模があるので、学校によってこうALTと触れあう時間にちょっと差があるのが事実だと思います。

それで、これはさっきの予算の話ではないんですけども、私の今考えてる事としては、将来的にもう少し、ALTを増やしたいなと。今は中学校と小学校掛け持ちでやっている

んですね。ALTがね。どっちがいいかわからないんですけども、小学校専門のALT、小学校をずっと何校か廻る。中学校は中学校のALTと。中学校と小学校わけた方がいいのか、小と中の繋がりがあるので、今までのように小中掛け持ちだけど、人数を増やした方がいいのか、どちらがいいのかはちょっと議論の余地があると思うんですけど、もう少しALTを増やしていただけないかなと考えています。

少なくとも、来年度開校する閑上小中学校では専属のALTを1人付けたいなっていう思いがあるんですね。今後、ALTを増員して、もっとALTと触れあう、また低学年の子ども達も、別に教科とか外国語活動がなくても、ALTと一緒に遊んだり触れあったりするっていう活動ができるんじゃないかなっていう気がしています。

それから、これをやっていく時に、ちょっと気を付けなきゃいけないのは、英語嫌いをつくらないということだと思うんですね。

私が以前に勤めていた市は、私が行った当時は、英語特区、今、「特区」というのがなくなりましたが。「英語特区」で小学校1年生から英語をやっていたんですね。そうすると、結構何年かやっていたので、高学年になるにつれて、もう英語が嫌いだったという子が増えていっちゃうんですね。1年生2年生ぐらいは英語楽しい、英語で歌ったりゲームしたり楽しい。だんだんもう中学校に入る前にもう既に英語嫌いが何割か出てきてしまう。

やる以上は好きな子嫌いな子出てくるのは仕方ないんですけども、その意欲を持たせる。英語をなんか私達の頃のような受験英語を詰め込まれれば嫌になってくると思うんですけど、そうでなくても、出て来るので、少し小学校の外国語英語の授業でも工夫をしていかないと、下手するともう小学校のうちに英語が嫌いだったという子が出て来るかもしれない。そうじゃなくて、さっきいろいろ出たようなコミュニケーション力を、意欲を持たせたりするような工夫っていうのを、まあALTもひとつのキーになると思うんですけども、考えていかなければならない感じがします。

山田市長

はい。ありがとうございます。

なんか、自分で言ったこととかいうか、また降りかかってきそうですけれど。

ALTの増員についてと英語力のある指導主事の配置についての宿題をいただきました、ありがとうございます。

浅野委員さん、その点についてどうでしょうか。

浅野委員

はい。そうですね。

私も実際、子どもがALTの方にそうやってお世話になってるわけなんですけれども、中二になりましたけれども下の子が、小学校のうちはALTさんが来てくれて授業があった。それがあった時のことをすごく楽しそうに実際話してくれていました。

もっと前、上の子の時なんか、そのALTさん、地元のお祭りなんかにも来てくれて、皆でワーツと寄って、子ども達本当に触れ合っているなって思っていたんですけども、まあ、中二になった娘ですね、あの、今すっかり英語が嫌いになって、実は、そのALTさんの名前すら分からないとまで言うんですね。ほぼ自分はしゃべったことがないというのにちょっとショックを受けまして、実際、私自身にも、その英語の苦手意識がありまして、しゃべれないので、娘にそんな好きになれなんて言えないので、普通に眺めていましたけれども、実際そういった、せっかくALTが入って下さっているのに、名前すら分からないと、ちょっと私もびっくりはしたので、教育長さんがおっしゃったように、そのどこからか、その苦手意識というものが出てしまっているんだろうなあというふうには感じました。

だけど、その外国人の方が嫌だとか、そういう感覚ではやっぱりないわけで。

山田市長

それはないの。

浅野委員

はい。

そういう知らない言葉で話しかけられるから怖いのでは一切なくて、興味がないっていうんですかねえ。

相原委員

だんだんとコミュニケーションとかで、楽しくこうやってきているのに、だんだん勉強くさくなるっていうやつなんで、そうすると嫌って子が出て来る。

浅野委員

はい。そうなのかなと思って。学校教育のことは、素人なもので、生きた英語学習という部分で素人目に考えて、その一生懸命に勉強しなきゃいけないとか、そういうふうになってしまうところがあるんですけども、その英語がかっこいいとか、英語の歌を聞いて、その歌詞を知ってみたいとか、映画も字幕を見ないでそのまま聞いて理解できるようになりたいとか、そう思えるような興味、掻き立てられるような流れでいくといいのかなあなんて思ったりしました。

山田市長

あの、先程の、瀧澤教育長から、英語嫌いをつくらないということにまさに尽きると思いますけれども、やはり相原委員からあったように、楽しいコミュニケーションだったはずなのになんか勉強みたいな、やらねばならぬ的な話しになってくると。

瀧澤教育長

さっき英語嫌いが増えてきたってのは、これはやり方が悪かったのかどうか分からないんですけども、さっき及川課長が話したように、外国語活動では「聞く、話す、読む、書く」のうち、「聞く、話す」音声言葉と表現が中心であまり単語を覚えたり、英語で書いたりってのは、外国語活動はやらないんですね。

それを1年生から6年生までやっていくと、子ども達が飽きちゃうってのもあるんですね。あまり、新たな意欲が持てない。英語で歌ったり、英語でゲームしたりというのを1年生からずーっとやってくるわけですから、それで反省で、外国語活動は、音声言語中心なんだけども、ライティングとかリーディングも入れたらいいんじゃないかっていうんで入れた学校もあるんですね。

あともう1つは、英語をこう使うっていうのを必然性というのが、なかなか感じられない。受験英語というのもまさにそうだと思うんですけども、名取で、ある学校でやってた授業では、もう地域に外国人の方を招いて、その人に何々を教えましょっていうテーマで「今度来るからね、その人に日本のことを教えましょう、僕たちの事を教えましょう」という、目的を持たせて取り組ませたりすると、意欲持ってやるとか。だから、ちょっとした工夫の仕方、英語に対する興味、関心っていうのもかなり変わってくるような気がします。難しいことではあると思うんです。

武田教育長職務代行委員

言葉の壁ってのは、日本語だって英語だってみな同じで、じゃ、日本人は日本語しゃべれないのかっていうとしゃべれるんですね。じゃ、書けるか、話せるか、ってなるとまた違う。だから、話せるっていうことと、さっき言った、話すってことと書くとか学ぶっていうのとまた違った質になってくる。

その辺のところをどういうふうにするか9年間のスパンの中で、3年生以上なんですけど、どういうふうにするか組み立てて、中学校から高校に送り出していくかみたいなところをしっかりと押さえておかないと、英語嫌いになったり、話せるけども使えないとか、書けないとかになってくるので、その辺の、どういうふうにするか名取の特色ある英語活動の中で、子ども、どういう段階、ステップアップしていったら、どういうふうな子どもに育てていくかっていうのも、大きなひとつの狙いだし、課題だし、目標でもある。その辺のところを検討していけばいいんじゃないのかな。

山田市長

実は深い話を今しているんですね。「聞く、話す」という二つの要素から、「読み、書き」まで。この結局移行期もしくは、ステップアップをどうしていくかっていうことがやはりその英語嫌いをつくらないっていうことに繋がると思うので、その素地から基礎に移行期の部分でのギャップをどう押さえていくかっていうようなことだろうと思います。

その辺、仮に英語力のある指導主事さんがいらっしやればですね、こういったことも含

めて。

瀧澤教育長

英語専門の指導主事は、理想といえば理想なんですけど、昨年度からおいでいただいている、学校教育指導専門員。今回閑上小中学校の、小学校低学年、それから小学校の外国語英語のカリキュラムを中心になって考えていただいたのも、学校教育指導専門員なんです。閑上小中学校って、来年から、この32年度に先に前取りして、更に1、2年生でも短時間の英語と親しむ時間を設けていくっていうのも、ひとつの名取、閑上だけの試みだと思うので、その成果とか課題を踏まえながら、他の学校にも広めていければなっていうな思いがあります。

山田市長

わかりました。

あの、ちょっと、英語だけやっているのとなかなか時間が。先程瀧澤教育長がおっしゃった、使う必然性って非常に私、大事だと思っていて、いろんな子どもを見てますし、うちの子どももそうですけど、やっぱり外国の友達ができたら間違いなく使います。まず英語を習う、英語に触れるで英語を学ぶ、英語を使うってことがあって初めて更に学びに戻って来る。

聞くのは分かるんだけど、しゃべりたいんだけどしゃべれないっていうのがあって、使う必然性があるから単語を調べたり、辞書に戻ったりっていうような、そんなことになってくるといいのかなあ。そういう意味では私、スカイプを使って国際交流っていうか、そういう交流活動みたいなことをするって、非常に効果的かなって思っております。

なので、相手の顔を見ながらあのインターネット上での会話になるわけですけど、結局、電話もそうですけど、目の前にいたらしゃべれないんですよ。それをこう、どう超えていくかっていうようなことが、使う必然性になるのかな、それは大きな学びに繋がるんじゃないかなと思っております。

それでは、生きた英語の学習につきまして、この程度のことにさせていただいて、家庭教育支援について、いきたいと思います。

では、事務局の方からお願いします。

五十嵐生涯学習課長

それでは、家庭教育支援についてでございます。資料に基づきまして平成28年度の生涯学習課で行なわれました家庭教育支援事業の現状、それに伴う課題、今後の取り組みについて説明申し上げたいと思います。

まず始めにですが、お手元の資料で、平成28年度事業ということで、5項目紹介させていただきます。

まず1つ目が、「子育て、親育ち講座」ということでございます。

これは各小中学校区を対象に実施しておりまして、主旨はですね、家庭の教育力の向上を図るため、家庭教育に関する学習、講座、学習会等を開催する小学校中学校を対象に学習活動を支援するという事で、支援内容につきましては、学校PTAの講演に研修に対しまして、講師謝礼を支援する。

これは、お金の支援ということになります。あるいは、それに使われる消耗品を支援するということもございます。

次に、「公民館家庭教育親子講座」でございます。

各公民館におきましても、「家庭教育親子講座」を行っております。

11公民館ある中で、7館、18講座を開催いたしました。

その他に各公民館では、親子レクリエーション大会などの行事を実施しております。

お手元の資料の備考欄ではございますが、記載しておりますが、公民館によっては、中学校、あるいは地域団体、あるいは家と書いてありますが、家庭教育支援チームと連携して、事業を行っている公民館もあります。

次にですね、「新入学家庭教育講座」ということになります。

こちらにつきましては、ほぼ全ての小中学校、新入学予定児童生徒の保護者を対象に、実施しております。

入学時健診、あるいは、新入学児童生徒保護者説明会の機会を利用して開催しているところでございます。

この内容でございますが、学校生活の中で、子ども達が起こりうる出来事に対して、保護者として心得ておきたいことや、知っておきたいこと、トラブルの解消法など、事例を基に学習します。

子供が入学する前に、このような学習機会を持つことで、保護者の不安の軽減、新生活へのソフトランディングができるように支援することを目的としておりまして、家庭教育支援チームの協力を得て実施いたしました。

昨年は、小中学校が、16校中13校行わせていただきました。残りの3校ですけれども、講座の時間の都合上、できなかったということで、資料のみの配布を行ったということもございます。

次に、「子育てサポーター養成講座」でございます。

これは、平成27年度より実施しておりまして、昨年は8月から10月まで6回実施しております。これは、広報ホームページで周知、募集をして、20名定員で募集をいたしました。ここに書いてありますとおり、参加者が6名ということで、非常に少なかったということで、非常に残念なところなのかなって思います。

この中身につきましては、「先輩のママパパ」子育てサポーターに興味や関心がある方を対象に実施しております。

目的は安心して産み育てることができる地域環境というのを推進し、地域で活躍できる人材の育成を目的としております。また、これにつきましても、名取市家庭教育支援チーム員の研修の場として活躍している講座でございます。

最後の家庭教育支援チーム員会議ですが、さきほど子育て教育支援チーム員の皆さまですね、いろいろ事業にお手伝いいただいているわけなんですけれども、こちらのチーム員の皆さんは、年4回会議を実施しまして、活動についての意見を伺ったところでございます。

今現在、チーム員は7名ということで行っているところでございます。この事業をすることにおいてですね、課題的なことを3点捉えております。

まず1つは、「家庭教育支援（教育委員会部局）と子ども・子育て支援（市長部局）関連する事項において、連携や課題を共有する手段がない」というところです。

連携というところでございますが、特にはないということでございますが、公民館講座の中では、市長部局の職員を講師として活用したかたちで、その講座なりを運営している事例はございます。

次に、「親子で仲間作りをできる環境づくり」ということで、こちらは親子が気軽に集まり、子育ての悩みを話し合い、共感共有できることが大切であるということから、子育てサロンというのを実施いたしました。

これは平成20年度より実施していたところなんですけど、こちらにつきましては、ここに書いてありますけれども、平成28年度支援チーム員の人材不足により、現在休止している状況にあるというところでございます。

そして3番目でございます。「家庭教育を支援する人材の育成や確保」ということで、さきほどの家庭教育支援チーム員の人材不足。以前は、20名いたんですが、現在7名ということで、その人材不足によって、やれる子育てサロンができないとか、事業に差し支わりがでてきているということが現状でございます。

子育てサポーター養成講座を受講した方に対して、声掛けをして、支援チームに入ってもらいたくないでしょうかということ声を掛けはするんですが、実際、入られる方もいらないというのが実情のようです。

今後の取り組みでございますが、資料をそのまま読ませていただきますと、地域の中でつながりを持てる環境づくりや、親の育ちを応援する学びの機会に充実、支援のネットワークづくりを行っていくということと、また、子どもの様々な問題を家庭にのみ帰着させないよう、家庭と学校、地域の協働による、地域社会全体で行う家庭教育支援を推進していきます。更に行政においては家庭教育支援と子ども子育て支援と連携した取り組みを充実させていく、そして今後、家庭教育支援に関するニーズ調査を実施した上で、具体的、中長期的な支援を検討していくといったところでございます。

ニーズ調査につきましては、以前は子育てサロンの中で親御さんに、いろいろとお話を聞いて、そのニーズ調査というものをやっていたんですが、現在中止しているため、そのニーズがわからない状況ということで、このニーズ調査は実施していくべきかなと考えています。

以上簡単ではございますけれども、課題、現状ということでございますので、よろしくお願いたします。

山田市長

はい。只今事務局から、家庭教育支援事業の現状と課題について説明がありましたが、教育委員会部局と、市長部局との連携が重要でありまして、特に連携の組織づくりが必要ではないかと考えております。

そもそも、20 人いた方が、抜けて行った背景には、やはり先が見えないというか、市として家庭教育にどう取り組むかがよくわからないといったような不安であるとか、一生懸命頑張ってはいるんだけど、なかなかそこからの発展形が見えないといったようなこともあったように伺ってしまして、やはり家庭教育というのは、全ての教育の基本のひとつかなということもあってですね、今回皆さんの方からそういう視点も含めてご意見等もいただけたらと思います。

いかがでしょうか。はい。相原委員。

相原委員

なんかその、家庭教育支援ってということで、今お話しがあったように、教育部局と市長部局との連携ってことですけど、今のあえて極端なことをいえば、教育委員会の中に、幼児教育云々をいれることがあるのか。逆に言うと、その本当に子育てをどうするかということで、全体的に話をするのは幼稚園だとか保育所だとか、そういう関係機関の皆が集まる時、あるいは入学前の子ども達と親御さんのところに「学校行ったらこんなことになるんですよ」って説明するような場面ってのはある。

そういうのは教育委員会として対応できるのかもしれないけど、個別の問題をちょっと抱えてて、どうするかってのは、まさに児童家庭相談員とかなんかの、市長部局が中心になってやる。ただし、その時にその、そこにだけ任せるのではなくて、そこへ行っていろいろ話し合われたことを学校とかなんとながきちんと把握して、あるいは学校で様々な親の不安を聞いたところと連携してやるってかかっていう繋ぎをやる感じではないと思う。

学校、教育委員会で子育てサロンとかやる、これ正直言ってね、私は難しいんでないかと思う。むしろこれは市長部局の家庭児童相談員あたりを中心にやっていく。ただし、公民館活動とかなんかでは、ここにあるような様々な人たちがトータルで、問題を抱えているから来て研修をうけるんじゃなくて、こんなあり方が、やっぱり考える必要があるんだなって、全体の講演とかね、あの家庭のあり方とかかっていうのは、そういう公民館のところで学ぶってということで、「うちの子どもについて」「うちの家庭ってこうなんだ」っていうのは、ちょっと教育委員会では厳しいではないでしょうか。

山田市長

はい。あの、今、相原委員の方から幼児教育関係について、幼児教育じゃないですね、幼児環境、いわゆるその子育て関係ですね、これに関して教育委員会局で取り組むのはちょっと違うんじゃないかというようなお考え。

まあ、その事をそのまま取り上げれば、確かにそのとおりだと思います。

学校でそういったことを取り組むっていうのは難しいと思うんですが、今回の家庭教育支援ということについては、成長の段階に応じて例えばその幼児期から小学校そして中学校とそれぞれのそのお子さんと保護者に対して、例えば小学校の時であれば、他の友達との関わりの問題であるとか、いじめの問題とか、幼児期であればもうちょっと違う、本当に子育ての根本に関わるような問題とかあるんだと思うんですけど、それらについて、成長の段階に応じて、どんな関わり、どんな支援ができるかというようなことで、確かに、おっしゃるとおり、教育委員会だけとか、市長部局だけではできかねるところなんですね。その辺の連携について、たまたま今日、全体の会議ということでしたので、取り上げるということになったわけなんですけど、今のようなことも含めて、それぞれの役割ももちろんありますので、どういったかたちで連携していったら良いのか、できるかどうかということもお話しを率直にお話しいただければと思うのですが、どうでしょう。

佐々木委員

こちらの家庭教育支援チームというのは、サポーター養成講座を受けるということが前提で、サポーターになってから家庭教育支援チームに入るといったことなんです。

五十嵐生涯学習課長

子育てサポーター養成講座というのを市で持っていて、そこでいろんな勉強してですね、それでその中で、中には、自分だけでそれを勉強して、終わりにする方もいらっしゃるんですけど、そこでこう、もっと上に行く、上を目指して行くために家庭教育支援チームに入るという方もいるということです。

佐々木委員

そのサポーター養成講座を受ける方が、一番最初の段階で、参加者が少ないという事は、なかなかやっぱり、人員が少ないってことにどうしても繋がってしまうのかなあって思うんですね。それで、広報とか、ホームページとかでいろいろ募集とかっていうのもされていると思うんですけども、わりとこう、PTA終わった時とかっていうのは、小中のPTA終って、高校のPTAはあるんですけども、わりと時間ができるっていいですか、そういう方になんか前もってお声掛けをしておくとか、ある程度、ピンポイント的にPTAさんにやっぱりそういう感じでお声掛けをしておいたりするっていうことも、ひとついいのかなあって思います。

ただ、広報とかホームページを見て、なかなかこれを受けてみようかなって勇気があると思うんですね。だから、そういった時間でも、少しでも子ども達のお母さん達のお手伝いができたらっていうふうに思う方もいらっしゃると思いますので、意識の高い方々も多いのではないかなって思うので、そういう方にピンポイント的にある程度声掛けをすとか、またこのサポーター養成にある程度参加して下さる方を、増やすっていうの

がまず大事なというふうに思っております。

あと、ニーズ調査というのをこれから実施されるんですよね。ニーズ調査と共にやっぱり親の意識というんですかね、そういうものとか、やっぱり家庭教育の実態調査というんですかね、そういったものも併せてもしできれば、それがニーズ調査の方にも生きてくるのかなあというふうな思いがいたします。

山田市長

はい。ありがとうございました。

佐々木委員

やっぱり、子育てをしやすい名取市、子育てをしやすい街なんだということを、皆さんにわかっていただくためには、そういったいろいろな策を考えていかなきゃいけないなと感じました。

山田市長

はい。ありがとうございました。

子育てしやすい街づくりっていうことで、そこを目標において、ニーズ調査なり実態を、子育ての実態をしっかり掴むべきだっていうことと、具体的にPTAのOB、OGの方に声掛けしたらどうかってことのような、いわゆる支援のネットワークづくりというんですかね、そういったことをしっかりやるべきじゃないかってことで、ご提言をいただきました。

ありがとうございました。いかがでしょうか。

先ほど、私、ここで考え方なんですけど、ひとつはやはり、方針なり、家庭教育支援っていうものを行政がどうしてもこう、専門分野に特化してやってるのは得意なんですけど、こうやって、横断的に横串を刺してっていうのは非常に苦手意識があるんじゃないかなと思うんですが、これはどうしても成長段階に応じて、支援していかなきゃいけないということから考えると、どうしてもこれは横断的にやっていかなきゃいけない。市長部局も教育委員会も、連携しながらやんなきゃいけないっていうことなので、まずその家庭教育支援ってことに対しては、方針なり位置づけなりをしっかりしていく必要があるんじゃないかと、そしてまた、それに対する体制整備ですよね。

教育委員会の例えば子育てに関する担当課であったりとか、もしくは保健センターであったりとかっていうような、体制の整備をしていかなければいけないでしょうし、あとは今、佐々木委員さんの方からご提言のあったように、支援のネットワークですね、その、行政だけが一生懸命やってもしょうがありませんので、市民協働っていうかたちの中で支援の輪をどうやって、ネットワークを広げていうかっていうふうなことが、根本のところも課題なのかなというふうなことで、今回、中長期的な取り組みを検討していくってなことでありますので、方向性としてはそういう感じなのかなと思うのですが。

武田教育長職務代行委員

資料を読ませてもらっている中で、一番悩んだところがここでした。

今、市役所にある、市役所の中で活動しているいろんな市長部局とか教育委員会とかいろいろあるのですが、それらが単独で、こういった事業をするのがなかなか難しい時代だなと思うし、進め方もなかなか難しいなあ。したがって、例えば子育てサロンの方達が、いろんな実態調査や課題を調べてみて、こういうアイデアがあって、こういうことをやりたいんですがというのを、サロンの方達と、例えば支援課とか教育委員会、いろんな人達と調整をしながら、ひとつの事業を組み立てていって実施し、人を集めて子育てに役立ててもらっているのが、今の一番良い方法なのかなあって思っていました。

教育委員会が特出していろんな事業に関わっても、なかなか成果も得られないし、人が集まらないっていうのが実態だろうと思います。丸投げってわけじゃないですけども、そういった事も含めて、例えばの話ですけれども、サロンの方達にいろんな事業とかいろんな掘り起しをいただいて、作っていただいたものを、市の方で活用して家庭や地域に返していく。あるいは人を集める。そういったのをまず集めたり、アイデア練ったり、支えたりしてくれるどこかがあれば、これうまくいくんじゃないかなって。市役所の課題もその辺じゃないかなと思うんです。

いろんなところがこう絡み合ったり、捻じれあったりして、問題があった時に、どうしたらいいだろうと思ったりする。そういう時代だと思うんです。

もう1つなんですけど、親御さん側に立ったことを考えました。うちの子は例えば3才になるんだけど、こういう課題があるんだけど、これはどこに聞いたらいいいだろう、どこで解決していったらいいだろうと悩んで、窓口は確かにあることはあるし、その方が、一旦相談に来て受けた時に最後まで面倒をみる体制になっているとかね、そこらへんのところがうんと大事なんだね。

いや、これは教育委員会、これは支援課です、とかね、切るんじゃないで最後まで、そのお子さんどうなりましたか、育ちましたね、小学校に入りましたね、追跡も含めてしっかり後押ししてくれるところがやっぱり必要なんです。それが、なかなか難しい。そういうのも、いわゆるその行政も、それぞれ特色があって、いろんな課があって、バラバラになるのは仕方ない、でもそれは、さっき言った子育てサロンっていうのはいろんな事業計画して市民の中に一つ考えるところ、もう1つは市役所の中の繋ぎ役になってくれる人、そういうのがないと、こういう課題っていうのは、いつまでも解決しないで、次送り次送りになってしまう、是非その辺もですね、いろんな部局の方にいろんな考えをお持ちの方、いっぱいいるし、逆にいろんな部局を歩いてみて、こういうふうならこういうふうに助ける事ができるはずだよなあって、お持ちの方が市役所の職員の中に結構いらっしゃるんじゃないかな、アイデアをお持ちの、それを吸い上げたり、活かしたりして、市長さん、いい案、市役所なり、まちづくりに役立てていただけたら、うれしいなあなんて思いました。

山田市長

組織論のことと、窓口でしたかね。

武田教育長職務代行委員

はい。そうですね。

山田市長

浅野委員さん。

浅野委員

はい。ちょっと話しが戻るかもしれないんですけど、その家庭教育支援チーム員が、最初は20人ぐらいいらっしゃって今7名になってしまったと。その立ち上がったのが、20年って言いましたっけ。その時はどういう方々が母体で20名もいらっしゃって始める事ができたのかなあって。子育てサポーター養成講座が、その時から最初のまずあって、20名集まって始まったのか、何か違う母体があって、その人達で始めたのかなあって、ちょっと思ったんで、子育てサポーター講座の参加人数がやっぱり少ないっていうのは、じゃあ最初はどうだったんだろうというふうにちょっと思いました。

山田市長

はい。きっかけというか、経緯ですよ。

浅野委員

はい。

相原委員

なんか、家庭教育支援って言うけど、じゃあ家庭教育支援って何を支援するの。不登校のことなの、親子のなかでうまくしつけがいかないことなの、あるいはその家庭内暴力あるからそれについてどうするのか、とか、親子関係がうまくいかないってことなのか、あるいはなんか学校に来て宿題さっぱりして来ないけど家庭でどうなっているの、食事してないみたいだけどうなってるのとか、もう、あとは、病弱だとか、発育不全だとか、様々なものがあって、そういうひとつひとつにどう支援をするかっていうのは、なんかこの、十把一絡げの家庭教育支援なんていうのとかでは捉えると逆に曖昧になってくる。もっとひとつひとつ、例えば不登校の問題については、教育委員会としてはこうするんですよ、家庭のところこんな親子関係のところをちゃんといろいろ相談に乗るのですよとかっていうふうにしてやっていかなくてない。なんかあまりにも漠然としすぎる感じがするね。

佐々木委員

対象の年齢って未就学児から中学、高校生くらいなんですか。

相原委員

なんかこれはさあ、公立幼稚園があった時の話のような気がしてしょうがないんだけど。

佐々木委員

小中学生だけではないんですか。

瀧澤教育長

ちょっと話が逸れるかもしれないんですけども。

山田市長

はい。

瀧澤教育長

今、私、教育委員会事務局でずっと仕事をさせていただいていて、確かに、市長部局との連携っていうのが、うまくいっているところもあるし、なかなか難しいところもあって、それが、お互いに怠けてたり、反目しあってるからではなくて、組織上の問題とか難しいところもあると思います。今、年に一回しか開催してないんですけども、特別支援連携協議会という組織があって、それは教育委員会部局の、去年までであれば、公立の幼稚園、小学校、中学校あと、私立の幼稚園それから公立の保育所、私立の保育所、保健センターとか、市長部局もみんな入っての会議なんですね。特別の支援が必要な子ども達、障害のある子ども達についての情報交換の場なんですけども、震災の前だったんですけどもそういう子ども達が、障害のある子ども達が、幼児期にどんな機関と相談を受けて、今度それが小学校に行くと、一からまた小学校の先生にいろいろ話をしたり、また新たな機関に行ったり、今度卒業しちゃうとまたっていうふうなところがあって、一貫して支援を受けられるような仕組みができないかっていうふうなのがきっかけで集まって、幼児期から障害の子どもがサポートファイルを持って、親が了解して、それぞれの幼稚園だったら幼稚園、保育所だったら保育所と共有する。その小学校にそのまま持っていくっていう、サポートファイルっていうのを作って活用してるんですね。具体的ところで、一緒にやろうって言えばやれるところはいっぱいあるんじゃないかと思うので、教育委員会の方でも積極的に、これは市長部局の力も借りないと難しいってのは、こども支援課とか福祉の方と連携していく必要があるかなって思ってます。

あともう1つ、今日の資料を見て、直接家庭教育支援事業というふうなことと関わることはないかもしれないんですけども、ちょっと気になった言葉が、「生命誕生、妊娠から

出産」「命の授業」「命のバトン」とかっていうふうなものです。ここに書いてない、教育委員会が関わっていないものの中でも、みどり台中学校でも何年か前からか、「心ふれあい講座」いうので、学校と地域とNPO、PTAとかいろいろ関わって、子ども達に命の大切さとかを教えているってというような授業があるし、増田中学校でも、「命の授業」ってのをやってると思うんです。

最近気になっているのは、仙台市とかで起きている、痛ましい事件とかを見るにつけて、子ども達に命の大切さ、自分の命の大切さ、人の命の大切さというのを、本当に教えるっていうか、わからせていかなきゃないし、親もそうだと思います。だからなんか、親子関係とかいろいろあるけれども、あなたは、こうお父さんとお母さんに愛されてこうやって生まれてきたんだよとか、綿々と何百年何千年も命がこう繋がってきたという事をその尊さとかそういうのを教えることが大切だと思います。それをやる時に、学校でもやるし、PTAとかでも取り上げてほしいし、NPOとか地域でも取り上げてほしい、例えばみどり台中学校のケースなんかみると、あれは、学校とPTA、地域、NPOやそういう組織がひとつになってやっているって、良いケースじゃないかなと思います。だからそういうふうになにか具体的なところで、皆が一緒になって、それが続いて行くというのは素晴らしいことだと思うし、この命の授業に限らず、さっきのサポートファイルじゃないんですけれども、なんか具体的なところで一緒にやれるところはあると思うので、私もこれからいろいろ模索しながら市長さんなどともいろいろご相談させていただきながらやっていきたいなと思います。

山田市長

今、この前に、相原委員の方からも、ちょっとぼんやりしてて、漠然としているってことがあったので、少し、家庭教育支援ということに対して課題を整理していただいて、その中でこう一緒にやれる一貫通貫でやっていく、段階に応じてやっていくってことが大事だと思うので、お互いに、このことについてどう連携していくかっていうようなことのまとめをしていきながら、またちょっと改めてお話しができればなっていうふうに思います。いかがでしょうか。

何か、最後に、よろしいですか。

武田教育長職務代行委員

いろんなことでもそうなんですが、例えばみどり台中のことなんかも4年かけて立て直した。いろんな公民館でも学校でもいろんな成果を得たってのがありますよね。発表というわけじゃないですけど、こういった誌面でも結構ですし、市民というか結構ですし、やっぱり市民に教えていくっていうか、知らせるっていうか、考えてもらうというか、そういう発表の場というのを、何かこう作ってあげて、交流も含めてね、名取ってこんなまちなんだね、こういうふうにしてるんだね、私達の地域もこういうふうにしたらいいんだよねって、そういう学びも含めた機会をいっぱいっていうわけにはなかなか

かいきませんけども、そういった機会を何かの時につくってもらってというか、入れてもらえるとうれしいなと思います。いろんな成果がいっぱいあります、いろんな地域には。

山田市長

はい。ありがとうございました。

それでは、以上で、あらかじめですね、お知らせしておりました議題についての意見の交換は終了とさせていただきます。

次に、4番のその他ですが、何か事務局の方からございますか。

相澤教育部次長兼庶務課長

事務局からは特にございません。

山田市長

それでは、大変お忙しいところ、ありがとうございました。

事務局の方にお返しいたします。

相澤教育部次長兼庶務課長

はい。本日は、大変活発な意見交換をしていただきまして、ありがとうございました。

それでは、以上をもちまして、第5回名取市総合教育会議を終了いたします。ありがとうございました。